

## 「アマンダ・ゴーマンさんの詩」

2021年01月27日

米連邦議会議事堂で行われたバイデン大統領の就任式は、州兵に守られた異例づくめの式典であった。トランプ氏は就任式に出ず、フロリダに帰ってしまった。第二次世界大戦後、世界の覇権を握った米国は、民主主義をリードしてきたことに間違いはないが、国が二分された悩ましい現実を露呈してしまった。民主主義は本当に手のかかる制度だと思われた。一筋縄ではいかない紆余曲折がある。しかし、権力者の一声で、解決されるよりはるかによく、健康的ではないか。悩みながら、人権を尊重し、共に生きる社会を作り上げていく。この労苦こそが、人間の営みである。式典の中で、22歳の詩人アマンダ・ゴーマンさんの詩、「The Hill We Climb（私たちがのぼる丘）」が朗読された。彼女の詩は、英国BBC放送電子版で、「時と空間を超えて残される詩だ」と絶賛され、世界中から大きな反響を呼んでいる。私もパソコンを通して読み、感銘を受けたので全文（高橋李佳子氏訳）を転載したい。

夜が明ける時、私たちは自分に問いかける。決して終わらないように見える陰の中、一体どこに光があるのかと。 / 私たちは、失なったものを背負い、海を渡らねばならない。 / 私たちは、窮地に立ち向かい、学んできた。静けさが平和だとは限らないことを。そして「正義」を定義する規範や概念が、必ずしも常に正しいとは限らないことを。 / それでも、私たちが気づく前に、夜明けはやってくる。なんとかして、私たちはやり遂げるのだ。 / なんとかして、私たちは乗り越え、そして目にした。この国は崩壊したわけではなく、ただ未完成だったのだと。 / 奴隷の子孫で、シングルマザーに育てられた瘦せっぽちの黒人の女の子が、大統領になるのを夢見ることができる。その子が、ひとりの大統領のために詩を朗読する。 / 私たちは、そんな国と時代の継承者なのだ。 / 確かに、私たちは洗練されたものとは程遠く、純粋で無傷なものともほど遠い。しかし、私たちは完璧な共同体を目指しているわけではない。

私たちは、目的のある共同体を目指しているのだ。 / あらゆる人の文化、肌の色、性格、状況を受け止められる国を作るために。 / だからこそ、私たちの間に立ちほだかるものではなく、私たちの前に立ちほだかるものに目を向けよう。 / 分断を終わらせよう。なぜなら私たちは、未来を第一に考えるから。まずは、それぞれの違いに執着するのをやめなければならない。 / 武器を置いて両手を広げよう。互いの手と手が届くように。 / 私たちは誰にも危害を加えない。すべての人のために、調和を求めよう。 / せめて、これは真実だと世界に知らしめたい。

嘆きながらも、私たちは成長した。 / 傷つきながらも、希望を抱いた。 / 疲弊しながらも、挑戦した。 / 私たちは永遠に結ばれ、勝利を手にするだろう。 / これから先、もう二度と敗北しないからではない。もう二度と、分断の種をまかないからだ。 / それぞれが自分のブドウの木やイチジクの木の下に座り、誰も恐れる必要のない世界を描くようにと、聖書は私たちに説いている。 / 私たちの時代に適うとすれば、刃の中に勝利はない。私たちが架けてきた全ての橋にこそ、勝利がある。 / それが約束の地、私たちが恐れずにのぼろうとする丘だ。

アメリカ人であるというのは、私たちが引き継ぐ誇り以上の意味がある。 / アメリカ人であるというのは、私たちが足を踏み入れた過去と、それをどう修復するかだ。 / 国を共有するどころか、粉碎し

てしまった力を私たちは見てきた。 / それが民主主義を遅らせるものなら、私たちの国は滅びてしまう。あと少しで、滅びてしまうところだった。 / しかし、民主主義は一時的に止まることがあれど、永遠に敗北することはない。 / この真実と信念をもってして、私たちは信じている。私たちが未来を見ているその時、歴史は私たちを見ているから。

今はまさに、償いの時代だ。はじめ、私たちは恐れていた。 / そんな恐ろしい時代を引き継ぐ覚悟は、できていないように感じていたから。 / そんな中でも、私たちは新たな章を書き上げ、希望と笑いを届ける力を見つけた。 / この破滅的な状況に、一体どう打ち勝てるのか。かつて私たちはそう思っていた。でも今、こう宣誓できる。この壊滅的な状況は、果たして私たちに打ち勝てるか？ / 私たちは過去に戻るのではなく、未来に進む。傷つきながらも一体となっていて、優しくも大胆で、力強く自由な国へと。 / 私たちは脅しによって引き戻されたり、邪魔されたりはしない。なぜなら、私たちの不実行性や惰性が次の世代に引き継がれ、それが未来になることを知っているから。

私たちの失敗は、次の世代の重荷になる。でもひとつ、確かなことがある。 / 慈悲と権力を、権力と権利を私たちが融合させれば、愛が私たちの遺産になる。そして、私たちの子どもたちが生まれ持つて得るものが変わるだろう。 / だから、私たちに残された国よりも良い国を残そうではないか。 / ブロンズ色の私の胸が呼吸をするたび、私たちは傷ついたこの世界を素晴らしいものへと変えていく。

黄金の丘がある西の地から、私たちは立ち上がる。 / 私たちの祖先が最初に革命を実現させたあの吹きさらしの北東の地から、私たちは立ち上がる。 / 湖畔の街に囲まれた中西部の地から、私たちは立ち上がる。 / 日が照る南の地から、私たちは立ち上がる。 / 私たちは再建し、和解し、回復する。 / そして、私たちの国の隅という隅まで、多様で美しい国民が現れるだろう。打ちのめされて、それでも美しい姿で。 / 夜が明ける時、私たちは臆することなく、炎の影から一步踏み出す。 / 私たちが解放すれば、夜明けはどンドン膨らんでいく。 / 光はいつもそこにある。私たちに、光を見る勇気があれば。 / 私たちが、光になる勇気があれば。

ゴーマンさんは、19歳の時、アメリカ詩人アカデミーや大統領芸術・人文委員会など、様々な芸術プログラムが参画する全米青少年詩人賞を受賞し、昨年、ハーバード大学を卒業した。詩の中で、自分を「奴隷の子孫で、シングルマザーに育てられ、痩せっぼちの黒人の女の子」と述べている。初めて、アジア系黒人女性のカマラ・ハリス氏が副大統領になった。ゴーマンさんは「大統領になることを夢見ることができる」と歌っている。有色の女性大統領が生まれる日も遠くではないだろう。私は、「我々は過去に戻るのではなく、未来に向かうのだ。この国は傷ついている。しかし全体としては、慈愛にあふれていて、大胆で、力強く、自由だ」という言葉に感銘を受けた。言葉は生きていて、その言葉は人に力を与える。また、希望は人に生きる勇気を与える。時代はいつも病んでいる。その病みの中で、真実の言葉を見つけ出し、明日を生きる道筋を見いだす。ゴーマンさんは「私たちが、光になる勇気があれば」と締めくくっている。分断と不安に覆われた時代に、未来を信じて歩もうとの呼びかけは、人々に深い感動を与えた。